

氏名(本籍)	谷 ^や 島 ^{しま} 弘 ^{ひろ} 仁 ^{ひと} (茨城県)
学位の種類	博士(心理学)
学位記番号	博乙第1,167号
学位授与年月日	平成8年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	学校場面におけるクラスの動機づけ構造に関する研究
主査	筑波大学教授 教育学博士 新井 邦二郎
副査	筑波大学教授 教育学博士 杉原 一昭
副査	筑波大学教授 教育学博士 太田 信夫
副査	筑波大学教授 長洲 南海男

論 文 の 要 旨

1. 目的

学校場面におけるクラスの動機づけ構造を、主として子どもの認知面から明らかにすることが本研究の主な目的である。そのために、本研究では Epstein (1988) による TARGET 構造の次元を参考にして、クラスの動機づけ構造を、教師がクラスにおいて生徒を効果的に動機づける上での、授業およびクラス運営上の実践的枠組みとして仮定し、クラスの動機づけ構造を多面的に明らかにしていく。

2. 方法と結果

第1章では、本研究の理論的背景について概観し、本研究の位置づけおよび本研究の目的について検討した。すなわち、クラス単位で生徒を動機づけるためのクラス環境に関する理論的検討を行い、Epstein (1988) による TARGET 構造をはじめとして米国において研究されているクラスの動機づけの構造化の理論について概観した。つぎに、クラスの動機づけの構造化に関する理論を日本のクラス環境に適用するための条件について検討した。

第2章では、学校場面におけるクラスの動機づけ構造の認知を測定するための尺度を開発した。第2節では、小学校6年生を対象として、Epstein (1988) の TARGET 構造の理論に基づきクラスの動機づけ構造測定尺度を開発し、第3節において基礎的な妥当性について検討した。第4節において、第2節で開発したクラスの動機づけ構造測定尺度を改訂し、中学校1年生を対象として改訂版クラスの動機づけ構造測定尺度を作成し、信頼性を検討した。第5節においては、改訂版クラスの動機づけ構造測定尺度の妥当性を検討した。

第3章では、クラスの動機づけ構造の下位次元の発達の検討を行った。第2節において、クラスの動機づけ構造の各下位次元の学年による変化を明らかにするために、中学校1年生から高校3年生に対して横断的検討を行った。その結果、生徒の内発的な次元である、クラスの動機づけ構造の課題志向次元および参加次元において、学年の上昇とともに尺度得点の低下する傾向が認められた。社会的な動機である承認次元および協調次元においては必ずしも一定した傾向は見いだされなかった。第3節において、クラスの動機づけ構造と環境移行事態との関連についての検討を行った結果、中学校進学という新たな環境において生徒の学習への動機づけが大きく影響していることが示唆された。

第4章では、クラスの動機づけ構造と生徒および教師の要因との関連を明らかにするために、子どもの動機づ

け関連要因，対人関係要因，教師要因をとり挙げ，クラスの動機づけ構造との関連を検討した。第2節において，クラスの動機づけ構造の認知が，個人内要因である達成関連動機とどのように関連しているのかを検討したところ，個人の達成目標の下位要因および一般主観的統制感とクラスの動機づけ構造の認知における下位次元との間に有意な関連が認められた。第3節において，クラスの動機づけ構造が，友達関係を中心とする対人関係とどのように関連しているのかを検討した。対人関係に関する指標として，公的自己意識，スクール・モラル，社会的コンピテンス，親和動機をとり挙げ，クラス動機づけ構造の認知における下位次元を対人関係との関連から多面的に明らかにした。第4節において，クラスの動機づけ構造が，クラス場面における状況要因である教師の要因とどのように関連しているのかを検討した。その結果，クラスの動機づけ構造と教師の要因との関連において，教師のリーダーシップおよび教師の勢力資源との関係が明らかにされた。

第5章では，教科の主要な要因および自己学習方略とクラスの動機づけ構造の認知との関連について明らかにすることを目的とした。第2節において，英語，数学，国語，理科，社会の5教科をとりあげ，クラスの動機づけ構造の各次元が，それぞれの教科をどの程度の割合で説明しているのかについて検討した結果，クラスの動機づけ構造の下位次元の重要性はそれぞれの教科において異なることが示唆された。第3節では，クラスの動機づけ構造の下位次元と教科学習における学習方略との関連について検討した。さらに，第4節において，特定の教科をとりあげ，教科における学習関連動機とクラスの動機づけ構造がどのように関連しているのかについての検討を行ったところ，クラスの動機づけ構造の下位次元が特定教科の学習関連動機とも関連していることが明らかとなった。

第6章では，クラスの動機づけ構造を形成する要因に関する因果モデルについてパス解析により検討した。第2節においては，クラスの動機づけ構造の認知における下位次元を最終目的変数とするパスモデルを検討した結果，生徒の学習的側面および社会的側面における成功期待が原因帰属様式を経てクラスの動機づけ構造の認知に影響を与えていることが示された。第3節では，クラスの動機づけ構造の認知の発達過程について短期縦断的観点からの検討を行ったところ，クラスの動機づけ構造の機能の形成と変化が構造的に明らかにされた。

第7章では，第1節において本研究のまとめと全体的考察を行い，第2節において，学校場面におけるクラスの動機づけ構造を研究するに際しての今後の課題について展望し，クラスの動機づけ構造の教育実践への適用の必要性および教師の視点からのクラスの動機づけ構造の検討の必要性について指摘した。

審 査 の 要 旨

従来長い間，動機づけは生徒個人の特性または状態として捉えられてきており，クラス（学級集団）としての動機づけが研究されることは少なかった。ところが最近，クラスの動機づけを構造的に捉え，それらをどのように体系的に高めていくかということが重要視されるようになり，アメリカではそのための教育ストラテジーも提案されるようになってきた。本論文は，そうした教育の最新の流れの基礎的部分を扱った心理学的研究と位置づけることができる。

本論文の第1の特徴は，クラスの動機づけの構造を生徒の認知を通して解明しようとした点である。これは，これまで見られないユニークな捉え方である。第2の特徴は，日本の教育の実態に即してクラスの動機づけの構造の内容を取り出し，その測定尺度を開発した点である。これにより，わが国のクラスの動機づけの構造が具体的に把握できるようになった。第3の特徴は，このクラスの動機づけの測定尺度を用いて，中学・高校生における学年の変化や生徒の個人内要因・教師要因・教科の要因などとクラスの動機づけのとの関連を明らかにし，その上でそうしたクラスの動機づけの形成要因の解明を行ったところである。さらに第4の特徴は，クラスの動機づけのなかで，学習面の動機づけだけでなく，クラスへの適応などの社会的な側面との関連を扱う新しい研究を模索している点である。

このようにしてたくさん新しい知見が得られたが、本論文の問題点として研究方法が質問紙法に限られていること、分析の仕方に統計的手法が多用されている反面、具体的内容の扱い方がやや弱いこと、クラスのなかで動機づけを教育的に行いその効果を調べるような介入実験が望まれることなどが指摘された。本論文は、今後さらに深く研究されるべき点を残しているが、わが国では未開拓であったクラスの動機づけの構造を心理学的に解明するという初期の目的を達成しており、その学問的意義は高く評価できる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。